編集後記

「我に天佑あり，と感じています」

2023年7月，第169回芥川賞の受賞会見に電動車椅子で登壇した市川沙央氏の言葉である．受賞作「ハンチバック」（初出『文學界』2023年5月号）の単行本（文藝春秋刊）によれば，著者は「筋疾患先天性ミオパチーによる症候性側彎症および人工呼吸器使用・電動車椅子当事者」である．この先天性疾患の病歴を思うとき，「天佑」を語る強さに心打たれた．編集子は文芸評論を述べる立場になく，もちろんその能力もないが，市川氏の受賞会見ならびに受賞作中の「読書バリアフリー」に関する発言や記述は注目すべきであり，医療者としても学ぶべき点が多いと考える．

「私が一番訴えたいのは，やはり読書バリアフリーが進んでいくことなので，環境整備を進めてほしいと思います．ちょっと生意気なことを言いますけど，学術界，学会誌でもなかなか電子化が進んでいません．障害者対応というのをもっと真剣に早く取り組んでいただきたいと思っています」（会見）

「私は紙の本を憎んでいた．目が見えること，本が持てること，ページがめくれること，読書姿勢が保てること，書店へ自由に買いに行けること，―5つの健常性を満たすことを要求する読書文化のマチズモを憎んでいた．その特権性に気づかない「本好き」たちの無知な傲慢さを憎んでいた」「こちらは紙の本を1冊読むたび少しずつ背骨が潰れていく気がするというのに，紙の匂いが好き，とかページをめくる感触が好き，などと宣い電子書籍を貶める健常者は呑気でいい」（作中）

自分は医療者として多少なりともマチズモ（健常者優位主義）に対して戒めをもち，疾患ゆえの種々の困難さに想像力を働かせてきたつもりだが，市川氏のこれらの指摘の前に一言もない．さらに作中では視覚障害者への配慮におけるアメリカやフランスの先進性が指摘されており，「日本では社会に障害者はいないことになっているのでそんなアグレッシブな配慮はない」とも述べられている．精神障害に対する呉秀三の箴言を想起せざるを得ないところである．わが国で『視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律』（読書バリアフリー法）が施行されたのは2019年6月であったが，さまざまな障害のある方にとって利用しやすい形式で本の内容にアクセスできるための取り組みが広がっていくことを強く願う．

さて本誌では2014年4月号から電子ジャーナル版が配信されており（現在では2007年1月号から閲覧可能となっている），振り返ると編集子はこれに関して本誌編集だより（編集後記）[1]において電子媒体と冊子体それぞれの利点を述べたが，電子媒体がもたらす障害者福祉上の利はまったく視野に入っていなかった．そればかりか冊子体の肩をもって「書籍のaging process」に関して偉そうなことを述べたが，健常者のいかにも「呑気な」解釈と言われても仕方がない．この機会に本誌電子媒体の利点に読書バリアフリーを書き加えたい．

最後に私事で恐縮ですが，思いがけず長期にわたって本誌の編集委員を務めさせていただいた．会員の皆様の投稿論文や編集委員会での査読プロセスを通じて実に多くのことを学ぶ機会に恵まれました．諸先生のご指導に心より御礼申し上げます．現任期の満了をもって編集委員を退任しますが，若手の後任者のご活躍を祈っております．

布村明彦

1）布村昭彦：編集後記．精神経誌，117（8）；697，2015